

鴻 koh

月刊俳句誌

昭和5年7月1日発行
(毎月1日発行)
第10巻第7号 通巻205号

7 月号
2023

創刊17周年記念号



近江一国草笛の音の遠ざかる

からつぽの魚籠干されぬる鮎の宿

青鷹一山に気の満ちてくる

葛切や途方に暮るるほどの雨

鑑真忌野のものを焚く火を熾す

縁側に円座一つと柏餅

バードウイーク一人で行くによき小径

神保町の書肆にひととき夏の雨

鷗外の一言半句南吹く

まひまひつぶり余生に急ぐことのなし

涼しきは森鷗外のデスマスク

根津に雨つつじは花を終へにけり

薔薇百花しばらくは刻忘れぬる

一言半句

主宰作品

増成栗人

夕薄暑

副主宰作品

谷口摩耶

陽炎を蹴散らす路面電車かな

茅花流しフランス積みの赤煉瓦

柏餅まづ味噌餡に手を伸ばす

更衣いつか捨てねばならぬもの

熱の子をひそかに見舞ふ夕薄暑

迂闊にも触れてしまひぬ茄子の棘

胡瓜揉む日暮の遅き厨かな

枝豆の跳んで会話の始まりぬ

短夜や読み終へるまであと少し

明易の静かな空を見てをりぬ

六月は一年中で一番夜が短い季節。静かな夜に読書や書き物で、つい遅くまで起きていると、空が明るくなって来て、慌ててしまうことがあります。「明易し」です。鴉が鳴きながら空を飛んで行くうちに、どんどん明るくなってゆきます。六月が終ると今年の上半期が終わります。頭で分かっているも身体がついて行けないため、月日の経つ速さを実感して焦ってしまうのです。

俳 作品抄

会員選

靴裏を合はせて叩く春の土
先頭の声たくましく雁帰る
通し鴨の水尾の割りゆく花筏
せせらぎの飛び飛びの石燕来る
猫の背に二ひら三ひら桜散る

中川幸恵
上杉馨
後藤美帆
針谷忠郎
長沢ひろり

谷口摩耶 選

同人選

風生れよまだやはらかき松の芯
蜥蜴出づ小さな影を引き摺って
百千鳥椿の枝を筆として
けふ在りて仰ぐ万朶の桜かな
五風十雨一人静のほつほつと
遠山に雪残りをり達治の忌
万愚節臨書の筆を替へてみる
蝶生れよ素十の句碑に昼の月
月おぼろ話し相手のなき散歩
いつせいに咲く満天星の静けさよ
島四国遍路が二人うららかに

山岸明子
神野未友紀
伊藤隆
山内宏子
畑田久美子
相川健
平野鉄哉
横山光榮
中西富士子
幡柏
水谷はや子

増成栗人 選

第十七回「鴻」賞 受賞作品

「鴻」賞を受賞して
佐藤あさ子

この度は、栄えある賞をいただきましたこと厚く御礼申し上げます。主宰様の御礼申し上げて、思案に暮れる日々でした。

私には身に余る賞でございますが、

俳句の楽しさをご教示下さいました田中一光先生、そして支えて下さいました「仙台権の会」、句友の皆様のおもてなしで拝受させて頂きます。初学の心を忘れず、俳句の楽しさ、おもしろさを語れるよう、一層研鑽して参ります。

主宰はじめ御推挙くださいました諸先生方に、心より感謝御礼申し上げます。

初恋通り

佐藤あさ子

七種粥母の遣ひし椀に注ぐ
出舟入舟冬あたたかき日なりけり
震災の日のことをふと春の星
誰彼にこの囁りを聞かせたし
青葉城跡かりがねの帰るころ



略歴

昭和二十三年 宮城県生まれ

平成十五年 仙台リビング新聞社の

俳句講座入会

田中一光に師事

平成十九年 「鴻」入会

平成二十年 「鴻」同人

俳人協会会員

咲き初むる籬の乙女椿かな
不規則に落ちる雨垂れ卯月くる
高遠をふとこの山の桜かな
薯の花祖母と歩幅を合はせけり
傍らの一書はヘッセ花は実には
海までは百歩生家の梅筵
小雨来る伊達の城下の星祭
赤とんぼついと初恋通りとは
志賀直哉短篇集を閉ぢて秋
一光も逝き久乃も逝きて月の背戸
ほろほろと茶の花の咲く石鼎忌

第十七回「鴻」新人賞 受賞作品

落葉千枚

菊池ひろ子

「鴻」を購読して日の浅い私に、
新人賞を頂き、驚き恐縮しています。
ご推薦頂きました皆様、俳句を指
導して下さい、冗先生に心から
御礼を申し上げます。

六年前、初心者の私は、公民館の
句会で冗先生にお会いし、俳句の基
本、作り方、句会の楽しさを教わり
ました。今、私は、日々の出来事や
感動をそのまま短い言葉にします。
それは俳句と向き合う楽しい一歩で
暮しを豊かにしてくれています。

これからも「鴻」の皆様から多く
の刺激を受けながら俳句を楽しみた
いと思います。

決心の空へ蹴り出す半仙戯
車椅子の百寿の母の花衣
端座して煎茶一服春立てり
下萌えの土手行く少年鼓笛隊
ラムネ飲む空の青さもひと息に



略歴

昭和十八年 愛媛県松山市生まれ
平成二十五年 船橋「薬円台句会」入会
令和元年 「船橋市俳句文芸賞」受賞
令和二年 「鴻」入会

百のトマト百の朝日を浴びてをり
ダリの絵の中に居るらし昼寝覚
掌から掌へ淡き螢火移しけり
手の湿り足の湿りや螢の夜
カンバスの大向日葵や原爆忌
一日を清しく畳む花芙蓉
紅葉且つ散るダム一望の慰霊の碑
響き合ふ地球と星と虫の夜
草叢のひとつひとつが虫の宿
母を残し落葉千枚踏みて帰る
全集も書架も古りたり冬座敷

「三浦・奇跡の森」

鈴木 崇



三浦半島の小網代の森は、流域が川のはじまりから河口まで自然のまま残る「奇跡の森」だ。京浜急行の終点駅・三崎口駅からバスで5分ほど、引橋バス停で下車し、谷の入り口から続くボードウォークを降りていくと、鬱蒼とした森が広がる。木道は川に沿って続き、河口干潟まで自然を観察して歩くことができる。

流域とは、降った雨水が流れ込む地域を言う。川に水が流れ込む葉のような形の凹んだ地形のことだ。この森は、流域まるごと緑に覆われ大きな人工的な利用がないという点で、「奇跡」なのだ。

かつてはゴルフ場開発計画などが持ち上がったこともあるようだが、保全活動によって残されることになった。そのあたりの経緯は岸由二・柳瀬博一著『奇跡の自然』の守りかた（ちくまプリマー新書）に詳しい。手つかずのまま残すというわけではなく、定期的に手入れをしながら森の状態を維持し、国立や県立などの公園管理にせず民間スタッフが管理案内を行っているなど、ユニークな保全活動によって森

の自然が保たれている。

流域の中心を「浦の川」が流れ、上流の川辺には巨大なシダ、アスカイノデが群生する。森の入口付近からいきなり緑が深いので気持ちが高まる。中流の湿原にはハンノキ林、下流の大湿原にはジャヤナギの林が続く。地形や地下水の状況によりさまざまな湿地環境が広がる。

地下水位が高く、池が点在するエリアはガマ湿地となっている。夏の季語「浦の穂」を意識するようになってようやく実物を見ることができた。

小網代湾の干潟には多くの貴重種が棲む。小網代の自然を象徴するのが、アカテガニだ。もともとは珍しいカニではない。普段は陸地に棲み、お産のときだけ海に入る。繁殖するためには必ず陸から海へと移動しなければならないのだ。小網代は森から干潟そして海まで自然が保たれているため、アカテガニがにぎやかに暮らす条件を満たしている。この森の象徴とされるゆえんだ。

夏の干潟では、カニがダンスを踊る。ち

ゴガニ、コマツキガニ、ヤマトガニなどのオスの習性で、求愛や縄張り活動の意味があるとされているが、解明されていない動きもあるそうだ。集団になってそろって踊る姿は見えていて楽しい。

湾の対岸に白髭神社がある。境内に「カンカン石」と呼ばれる石があり、叩くと金属製のよい音がする。この石は四国で採取されるサヌカイト。もともと船の石錨に使われたもので、ここが風待ち港であったため、江戸に向かう四国の船が碇泊していたことに縁起がある。カンカンと澄みきった音色が小網代の輝く海によく響く。



小網代の森

羽音集

谷口摩耶 選



会津 中川幸恵

また遊ぼと手をとり帰る花の道のどけしや口中の飴からころと蛤の開けば夫の蘊蓄ぞ靴裏を合はせて叩く春の土先頭の声たくましく雁帰る春の風頬をひやりと撫でてゆく実る日を思ひ描きて畑を打つ

札幌 上杉 馨

すがすがし朝の雲間のすみれかな古民家の二階は茶房さくら咲く堀割の目を纏ひある桜かなガーベラを三本買って戻りけり夫眼りをりひたひたと菜種梅雨通し鴨の水尾の割りゆく花筏知恵の輪を取り合ふ姉妹春の雨母と娘のそつと触れたる雪柳

名古屋 後藤美帆

春愁や年々増ゆる診察券せせらぎの飛び飛びの石燕来る眼鏡拭く春愁の息かけて拭く行く春や天気頼みの旅支度

松戸 針谷忠郎

栗庵閑話

虫丸



<http://www.haisi.com/koh/index.htm>